

令和4年度第2回秋田県立博物館協議会（要旨）

- 1 開催日時 令和5年2月15日（水）
午前10時から午前12時まで
- 2 開催の場所 秋田県立博物館 大会議室
- 3 出席者 20名
 - (1) 委員
上野 智明 委員
梅津 一史 委員
加藤 薫 委員
後藤 節子 委員
菅原 香寿美 委員
田口 義則 委員
西村 美智恵 委員
早川 敦 委員（協議会会長）
藤田 和彦 委員
松橋 睦子 委員
棟方 幸人 委員
湯澤 寛 委員（協議会副会長）
 - (2) 生涯学習課 糸田 和樹 生涯学習・学芸振興班学芸主事
（兼）社会教育主事
 - (3) 事務局(博物館)
小園 敦 館長
関谷 洋之 副館長
新堀 道生 展示・資料班長
藤原 尚彦 普及・広報班長
丸谷 仁美 学習振興班長
児玉 弥生子 総務班長
佐藤 貴子 総務班主査

4 議事概要

- (1) 開会
- (2) 館長あいさつ
- (3) 会長あいさつ
- (4) 案件

ア 報告 「令和4年度事業経過及び令和5年度事業計画（案）について」
展示・資料、普及・広報、学習振興の各班長から説明

報告についての委員からの意見及び質問に対する回答は次のとおり。

(委員) 今年度の特別展で実行委員会を結成した秋田テレビや、運営面で連携したイベント企画会社などはノウハウをたくさん持っており、色々な知見を得ることができたと思うが、今後、博物館で展示を行う上で参考になったことや取り入れていきたいことがあれば教えてほしい。

来年度の特別展・企画展の中で報道関係者等と連携するものはあるのか。

大学生の研修についてどのようなカリキュラムで実施しているのか。

(事務局) 特別展でのワークショップ開催や物販を行ったが、今までこのような経験はなかった。アウトソーシングにより大きな反響が得られ、どのようにスペースを活用したらよいか、具体的なことが分かり勉強になった。

令和5年度の特別展は博物館単独での開催となっているためマスコミ等との連携はないが、今年度得られたノウハウは取り入れたい。

大学生の研修等については、博物館でカリキュラムを組んで募集しているということではなく、大学側から主に授業の一環として利用したいということへの対応として、展示室の見学や開催中の企画展等の解説を行っている。

(委員) 企業向けの研修等で具体的なものはあるか。

(事務局) 今のところ具体的なものはないが、要望があれば対応する。

(委員) 孫が通っている小学校に博物館の職員が出前授業に来てくれた。社会の勉強で昭和のことを学び、子どもたちがとても喜んでいた。展示を実際に見たいということで、次の土日に何組か家族で博物館を訪問している。今後も出前授業を続けてほしい。

(事務局) 博物館には様々部門の職員がおり、学校から要望があればできるだけ伺うようにするので、ぜひ利用していただきたい。

(委員) 出前授業がきっかけになり、子どもたちが親と一緒に博物館に行くことが来館者の増加につながると思う。

(委員) 出前講座は申し込み方はどのようにするのか。

(事務局) 博物館からの広報を年度当初にしている。どのような授業を求めているかを学校の先生方と細かく調整して伺うようにしている。大学にも行くのでよろしくお願

いしたい。

(委員) 博物館ボランティアの「アイリスの会・薫チーム」には、PTAの一つの学年からの依頼を快く引き受けていただいた。12月に注連飾りを作るというタイムリーな催し物で、子どもたちだけでなく保護者の方が一生懸命やっていて楽しんでいた。学校の場所が遠いので、博物館の催し物や出前授業を把握している者が少なかったが、他の学年の保護者からの関心が集められてよかったと思う。

(委員) 出前講座、出前授業が大変好評なので引き続きお願いしたい。

(委員) デジタル化に対応した新規導入の機器とは具体的にどのようなものか。

(事務局) 大型モニターを複数台導入しており、展覧会や常設展示での利用を想定している。360度カメラも導入しているが、利用のしかたについては検討中である。

(委員) 前回の会議でもデジタル化に対応した人材確保が懸案事項の一つだという話が出たが、見通しはどうか。

(館長) 県に要望しているが、現在のスタッフの中で研修等をして対応せざるを得ない状況にある。令和5年度以降も人材の育成と確保について、博物館協議会からも強く要望されたという認識をもって進めていきたい。

イ 協議 令和4年度ミュージアム活性化事業「特別展」の評価について
協議会委員による外部評価のまとめ、来館者アンケート集計結果、「特別展」の分析と報告についての資料をもとに事務局より説明し、委員から意見を伺った。

(委員) 予想を上回る入場者数だったということは、特にファミリー層が参加できるイベントのニーズが高いということを表しているのではないか。メディアを通じた広報に効果があり、恐竜をテーマにした映画の公開とも重なり非常に盛り上がった。今後も子どもたちにターゲットを絞ってもいいのでは。子どもたちが興味のある昆虫、宇宙、アニメ、ゲームなどに焦点を当てた特別展ができるのではないか。

(委員) 広報の効果が非常に高く、集客につながったのが大きい。博物館単独でやろうとすれば展示本体の予算も大きくなるので、連携した形でなければ実現は難しいと思う。内容については他の施設のイベントと棲み分けて、客の取り合いに

ならないように、方向性を考えたほうがよい。

- (委員) 予算等の関係もあり、常にこのような特別展ができるとは限らないと思うが、来年度もポスターやチラシを全県の学校や市町村の窓口、公民館等で掲示したり配布したりして、親子で来られるようにしてほしい。
- (委員) 来年度の特別展についても、前もって情報があれば来場者は増えるのではないか。他県で恐竜展を見たが、恐竜の年表が壁一面にあり、時代の流れが分かるような展示に子どもが興味をもっていた。恐竜の展示がなくても面白がっており、目で見て印象に残ることが大事だと思った。広報についてはテレビの影響力のすごさを感じたが、毎回できるかというとなかなか難しい。ラジオでの広報は運転中や職場で繰り返し聞いたり、職場で流れていたりすると、何となくその気になり興味をもつという宣伝効果があるのではないか。
- (委員) 今年度のような形での連携ができないとすれば、来年度の特別展ではリニューアルしたホームページでの告知が大切になると思う。資料の「地域の活性化及び観光需要への対応」についての改善提案に、地域振興につながるということで農産物の販売をしたらという記述があった。特産物を色々なところで販売する機会が少なくなっているから、特別展や企画展の来場者に対し、例えば秋田県が音頭を取って、各地域が順番に特産物を販売したりPRしたりすることも面白いのではと思った。
- (委員) 展示スペースがあまり大きくない分、スマートフォンでQRコードを読み込んで情報が得られれば、いい展示ができるのではと思った。長期休業に合わせて子ども向けの展示があるのはよい。美術館や博物館、図書館などの学びの場は静かにしなければいけないというイメージがあるが、展示物から音が出たりクイズがあって話をしながら見られたりするのはよかった。
- (委員) 毎年夏には博物館で面白いものがあるということが定着することが大事だと思う。宮城県や首都圏の大型の展示会はマスコミ連携を深めながら行っていることが多い。放送局、新聞社等との連携を計画的に進めることが、夏休みを盛り上げる機会になる。限られた予算での実施ではあるが、あと5割くらいかけられるのであれば、より充実した内容にできたのではないか。予算をより教育文化の充実に結びつく事業に充てる取組を進めていただくと、一層博物館が盛り上がっていくのではないか。
- (委員) せつかくの博物館での展示なので、学術的な内容がもう少し濃ければよかった。

特別展を見てそこから実際に関わるような場所に行けたり、つながったり、資料のある場所に行ける仕組みがあれば地域の活性化につながっていくと思う。次の特別展もただチラシだけを見ると博物館でどんなことをやるのか想像がつかないと思うので、考古学的に民俗学的にどういうものかをわかるようにしてほしい。

(委員) 主催が一つのメディアであっても、面白い展示であれば他のメディアも全く来られないというわけではない。面白いコンテンツがあればみんな集まる。一般の人が多く訪れるための要素の一つが、いかにお金をかけずに、情報をどのように拡散するかということではないか。一つ目は目玉となる展示の作り方、二つ目としてお金をかけずに拡散する上で、SNSをどのように活用していくかということだと思う。情報発信にはできるだけお金をかけずにやれる方法を考えてみてほしい。館長は、「デジタル化の技術的な部分は若手の方が習熟している」と話をしていたが、裏を返せば年配の方が発信していれば、逆に他にはない動きである。面白くフランクに発信できる人が役割を担えばよい。滞在時間を長くするための工夫が、満足度を高めることにつながる。

(委員) 3万2千人を超える来場者はすごいことである。色々な評価があると思うが人が来なければまずは話にならない。展示等に関しては、県立の施設でできるかがわからないが、クラウドファンディングで費用を集めるというやり方があるので検討してみてはどうか。屋台や農産物の販売については、敷地の問題もあると思うが、どの年代でも楽しみにしていることだと思うので検討していただきたい。

(委員) 恐竜展は小学校高学年くらいになるとどうしても興味の対象から外れてしまい、物足りないという意見をもっているようだ。やはり限られたスペースでは難しかったのではと思う。こういう時こそデジタルコンテンツの活用が鍵になってくるのではないか。QRコードを用意しておいて、より詳しい解説に飛んだり、VRで仮想空間を最大限に利用して狭いスペースの問題を緩和するというやり方もあったりするのではないか。次年度の特別展は人形展ということで、興味の対象はだいぶ限られるのではないか。多面的なアプローチで見せ方を工夫することが多くの来場者を獲得することにつながると思う。縄文土器の話や人形の作り方など、子どもでも興味のもてるコンテンツを一部用意しておくような仕組みがあるとよい。

恐竜展の展示はすべてアウトソーシングだったのか。また、博物館として展示に工夫された部分を教えてほしい。

(事務局) 基本的には企画会社が用意しているが、恐竜の化石数点は博物館職員が東北地方の施設から借りて展示した。

(委員) 博物館が中をアレンジしながら展示することは可能か。

(事務局) どうしても造作はほとんど業者が決めてしまうので、そこに手は入れられないが、ケースを足してその中で博物館が用意したものを出すことは可能である。

ウ その他 ウェブサイトリニューアルについて

副館長が2月1日にリニューアルしたウェブサイトの見どころなどを紹介し、委員から意見を伺った。

(委員) 他県の博物館のサイトを見てみたが、ここまでまとまっているものは他にはないと感じた。ぜひとも多くの人に見てもらえる工夫をしてほしい。これを見たら絶対行きたくなると思う。

(事務局) 秋田魁新報にはウェブサイトリニューアルの翌日に紹介記事を掲載していただいた。

(委員) 最近の若者の傾向として、何かを検索するとき、まず画像検索から入ることが多い。画像をたくさん使うことは大変よい。

(委員) Facebookはあるか。

(事務局) 現在はFacebook担当者が更新をしており、ここ最近では現在開催中の「新着・収蔵資料展」について掲載している。この企画展に関しては、先日、展示・資料班長がケーブルテレビに出演してPRした。ウェブサイトリニューアルについても告知した。

(委員) なるべく皆さんに広く知れ渡るとよい。

(委員) ウェブサイトリニューアルについて、「あきたビジョン」のツイッターに上がっているか。現在、博物館としてツイッターを持っていなくても、使えるSNSは県を含めて頼んでみてもよいのでは。リツイートでどれだけ見ているか反響が分かる。

(5) 閉会